

笑顔で冷遇する婚約者に疲れてしまいました

登場
characters
人物

ヒューゴ

「黒鷲」の異名を持つ、
圧倒的な武力を誇る
ジオ公爵家の令息。
一途で独占欲が強く、
愛する人のためなら
手段を選ばない。

クリスティーナ

セルヴィー伯爵令嬢。
幼い頃からシャルルに恋心を抱き、
冷酷で理不尽な条件を
呑んで婚約する。
シルクや化粧品に精通している。

シャルル

クリスティーナの婚約者。
ヘインズ伯爵令息。
誰にでも優しい
完璧な王子様……？

ジネット

クリスティーナの親友。
ゼオロエン侯爵令嬢。
セインの婚約者。

ゼイン

ヒューゴの親友であり、
彼の良き理解者。
モルソン公爵令息。
ジネットの婚約者。

エルザ

クリスティーナの親友。
ウイロウ侯爵令嬢。
クリストファーの婚約者。

クリストファー

ヒューゴのいとこ。
リアン王国の第二王子。
エルザの婚約者。

ヴェアトリス

隣国の大公女。
期間限定の留学生。
シャルルを気に入っている。

第一章 望まれない婚約

私はクリステイーナ・セルヴィー、伯爵家の娘。

今日はゼイン・モルゾン公爵令息の誕生日パーティー。ゼオロエン侯爵家の長女ジネットと友人になって以来、彼女の婚約者であるモルゾン公爵家からも招待状をもらっている。

私はいつも通り婚約者——ヘインズ伯爵家のシャルル様を伴わず参加している。

普通は婚約者に同伴してもらうのだけど、彼とは必要最低限のものだけ一緒にという約束だし、もし誘ったとしても彼のことだから「なぜ誘うの？」と言えそう。

そのうえ、現在、家族は全員領地において、タウンハウスで暮らすのは私だけ。お父様の代で新たな事業を三つ始めて成功した結果、お父様もお兄様も多忙で、パートナーとして参加してもらうのは難しい。

モルゾン公子がジネットと一緒にこちらにやってきた。

「クリステイーナ嬢、よく来てくれたね」

「モルゾン公子、お誕生日おめでとうございます」

「ありがとう」

挨拶を終えると、ジネットが問いかけてくる。

「ティナ、その化粧は新色？」

セルヴィー領では肌に負担の少ない化粧品を開発し、私はオーナーとして王都に店を構えていた。五歳下のモルゾン・エステル公女も肌荒れに悩んでいたけど、相談に乗り、今では肌荒れは落ち着いている。

「そうなの。やっと安全な新色の商品化に成功したの。エステル公女にもお土産として持ってきたわ。ジネットとエルザのお屋敷にも届けさせたから」

ジネットと、ウィロウ侯爵家の次女エルザは、王立学園のクラスメイト、今では親友と言っても過言ではない。エルザは第二王子殿下の婚約者でもある。

そんな二人は、本来、私などが親しくできる相手ではないけれど、入学時から好意的で仲良くしてくれて、ティナと呼ばれている。

そう答えると、新作の化粧品に喜ぶジネット。その隣で、モルゾン公子が微笑みながら言う。

「クリスティーナ嬢に会ってもらいたい奴がいるんだ」

「あの、モルゾン公子、私は……」

「行きましょう、ね？」

嫌な予感がするけど、ジネットに手を引かれて仕方なくついていく。パーティー会場の片隅で談笑をする令息たちの輪にモルゾン公子が入った。

「ヒューゴ、紹介したい子がいるんだ。彼女はクリスティーナ・セルヴィー伯爵令嬢だ。クリス

ティーナ嬢、彼がヒューゴ・ジオ、公爵家の長男だ」

ワインレッド色の髪に、黄色に近いオレンジ色の瞳をしたジオ公子は、あからさまに不快な顔をした。服の上からでもわかる鍛えた体、背が高く、見下ろされる形となっているので、かなり威圧感がある。

ジオ公子といえば王妃殿下の甥、明らかに私から話しかけてはいけない。とはいえ、紹介されて挨拶をしないわけにはいかず、当たり障りのない対応をしてさっさと離れるほうがいいと判断した。

「初めまして、クリスティーナ・セルヴィーと申します」
「初めまして。……ゼイン、女を紹介するのはやめてくれ。言い寄る女に辟易してるのを知ってるだろう」

「そういうんじゃないんだ」

モルゾン公子とジオ公子は揉め出した。

「ごめんなさい、ティナ」

その様子を見たジネットが気まずそうに謝ってくる。

「こうなって当然だわ。これでわかってくれたでしょう？ 高貴な方々に伯爵家の娘なんか紹介しても迷惑なだけよ。モルゾン公子に挨拶はできたし、失礼して公女と少しお話ししてから帰らせてもらうわね」

「ティナ、怒らないで」

ジネットが私の腕に絡みついて引き止めようとした。

「はあ、怒っていないわ。冤罪を着せられた気分になって少し不愉快なだけよ。モルゾン公子、ジオ公子、失礼いたします。ジネット、またね」

カーテシーをしてその場を立ち去り、公女を探した。

「ちよつとあなた、ヒューゴ様に近寄るのはおよしなさい」

振り向くと、少し年上らしい令嬢たちに囲まれた。

「そうよ、あなたが言い寄っていいお方ではないのよ」

「そうですか」

紹介されただけだと弁解するのも面倒で、ぞんざいな返事をしてしまったのがいけなかった。

——ジチャビチャビチャ。

「さつさとお帰りなさい」

そのうちの一人の令嬢が持っていたワイングラスの中身を、私の頭の上にかけてのだ。

「ちよつと、何をなさるのですか！」

追いかけてきたジネットがその令嬢に抗議しながら、ハンカチで私の顔を拭こうとする。

「大丈夫、帰るから。公爵夫人に早々に帰る失礼をお詫びしていたと伝えてね」

「ティナ」

心配するジネットに軽く手を振り、ハンカチで拭いながら離れる。

「よく一人でパーティーに出席できるわね」

「男漁りに出かけるのに婚約者がいたら困るからよ」

「モルゾン家にすり寄るばかりか、第二王子殿下にまで媚を売って」

「なんでシャルル様はあなたなんかと」

「身を引けばいいのに」

近くのドアに向かう途中、すれ違いざまに令嬢たちから、心ない言葉を囁かれる。

だけど、もう慣れた。私は聞こえないフリをするか、微笑むだけ。食べ物や飲み物で髪や服を汚

されても、文句さえ言わない。

みんなの王子様と婚約したのだから仕方ない。

「みんなの王子様」と表現するのは、彼が絵画から出てきたかのような美貌を持っていて、その微笑みと物腰の柔らかさはロマンス小説の男主人公を彷彿とさせるから。

私が彼の婚約者になれたのはお父様のおかげ。入学前にお父様が私の気持ちを察して縁談を申し入れ、リアン王国の西南に領地を持つヘインズ伯爵家は承諾した。結婚後にセルヴィー領特産品の一つである大陸一高価な特級シルクを融通する契約になっている。

婚約の話が出た当時を思い出す。

当主同士の話が済み、契約書に署名する前にお父様が最終確認として、彼と二人で話す時間を作ってくれた。

輝く銀髪を一つに束ね、青い瞳を細めて微笑む彼に見つめられ、私は天にも昇る気分だった。けど、すぐに現実を突きつけられる。

『僕たちは政略結婚なのはわかるね?』

『はい。ですが、私はシャルル様をお慕いしております』

『……僕は束縛されるのが大嫌いなんだ。嫉妬する女性もね。婚約中は恋人を作るかもしれないし、その場限りの花を愛でるかもしれない』

彼は頰杖をつき、お茶の入ったカップの縁を指でなぞる。

『結婚してからも愛人を作るかもしれない。それについて不満を抱いてもらっては困る。覚悟がないのなら署名はしないでくれ』

『……』

『ルールは守る。跡継ぎは君の産む男児にするし、正妻としての権利も保証する。だけど、愛人に子を産ませ、引き取る選択もありえる。その場合、君は正妻としてその子を丁重に迎えなければならぬ』

笑顔を崩さずに言い放つ。聞き間違いであってほしいという願いは、彼の追い打ちで消し飛ぶ。

『君も婚約中に恋人を作ってもいいし、乙女でなくてもかまわない。結婚してからも愛人を作ってもいい。愛人との子を産みたければ、実家に戻ればいい。どうかな、それでも婚約するかい？』

『はい』

『結婚前は君との交流は最低限となるだろう。婚約者の同伴が義務になっているもの以外は誘わないでほしい。学園でも君は君の友人と、僕は僕の友人と過ごす。いいね？』

『……はい』

仕方なく同意すると、彼は契約書に署名をしたのだった。

それからというもの、彼は徹底していた。

婚約者との交流はほとんどない。目もほぼ合わさなし、会話はほぼない。パーティーに同伴してもそれだけで、エスコートもない。

彼は婚約者などいらないかのように楽しむし、別々に出席するときには他の女性と消えてしまう。

正妻となれる未来に感謝して、物分かりのいい女を演じている。たとえ彼が私に向けたことのないような表情を見せていても、他の令嬢を引き寄せ唇を近づけていたとしても。

そんな日々を婚約以来、続けている。

パーティーの翌日の日曜日、昼食を済ませると、執事が面会願いを伝えに来た。相手はジオ公爵令息。きつと昨夜の続きで、ネチネチと俺に近づくなとか文句を言われるのだろう。拒絶を示した相手に時間を割くほど暇ではない。

それに、関わるなど意思表示をしたのは彼のほうだ。公爵家からの面会願いを断るのは好ましくないけれど、予定があるからお断りするように伝えた。

「贈り物もいくつか届いております」

「いくつか？」

「はい、贈り物はお嬢様のお部屋にお運びしました。ゼオロエン侯爵令嬢から焼き菓子、モルゾン公爵夫人から髪飾り、モルゾン公爵令息からお花が。また、ジオ公爵令息から――」

「ジオ公子からの品は送り返してちょうだい。関わりたくないし、いただく理由もないし、きつ

けを作りたくないの。私の名前で送り返して」

公子の名が出た瞬間、執事の話の遮って命じた。

「かしこまりました」

私の言葉を聞いて戸惑う執事だったが、テーブルの上にジオ公子以外のメッセージカードを置いて退室した。

私は残されたカードを手取る。

嫌な思いをさせてごめんなさい。ジネット

ヒューゴの無礼を代わりに謝罪する。ゼイン

ドレスの弁償をさせるから、いくらかったのか教えてちょうだい。ヴィオラ

「ふふつ、公爵夫人ったら」

三枚目のメッセージカードに思わず笑ってしまう。

この後、宛名と請求主を空欄にした請求書を書いて、特級シルクのハンカチを三枚添えてモルゾン公爵夫人に送った。あの令嬢は、彼女のドレス五十着分でもまったく足りない額に驚くかしら。

翌日。登校すると、エルザと一緒にいたジネットが私に気づき申し訳なさそうな顔をした。

「ティナ、本当にごめんなさい。ワインまでかけられるし……」

「ジネットのせいじゃないわ。なのに、お菓子までありがとう。それに、公爵夫人が懲らしめてくださるらしいから大丈夫よ」

「懲らしめるって？」

「あれはセルヴィー産の特級シルクを使って作らせたドレスなの。宣伝も兼ねて着ていったのよ。ワインの染みなんか落ちないから、公爵夫人が代わりに請求してくださるそうなの」

「怖いけどいくらなのか聞いてもいい？」

二人に耳打ちをした。

「えっっ!!」

「シッッ！」

「うちがそんな大金を請求されたら結婚するまで外出なんて許してもらえないわ」

「私もよ。購入品も制限されるでしょうね」

「モルゾン公爵夫人からは髪飾りを、公子からはお花をお詫びにいただいたわ。もう充分よ。あ、ジオ公子からも届いたけど、送り返したわ」

「え!？」

ジネットがものすごく驚いた顔をした。

「面会の申し込みは断ったし、お詫びらしき品とカードは見ないで送り返したから、中身とか文と

かはわからないけど」

「……信じられない、あのジオ公子にそんなこと」

「だって、あの態度を見たでしょう？ それに、彼のファンにワインまでかけられたのよ？ 笑顔で受け取って、お札の手紙なんて書いてみなさいよ。また言い寄る女扱いされて、会ってもクドクドと嫌みを言われる気しくないわ」

「そ、そうなのね。一応ゼイン様に報告してもいい？」

「いいけど、お友達の奇行を止めてくださいって伝えておいてね」

「さすが婚約者一筋ね。ティナが怖い子だって初めて知ったわ」

「ジネットたちと笑っていると、後ろから名を呼ばれる。」

「クリスティーナ」

愛する彼の声を聞き間違えるわけがない。笑顔で声の主のほうへ振り返った。

「シャルル様、おはようございます」

私は通常、令嬢が選択する貴族科に在籍しているけど、彼は一ヶ月前で経営学科に在籍している。彼の学年の経営学科は、過去最高数の女生徒が集まってしまい、足切りをして貴族科へ移したと話題になった。

「おはよう、一昨日はどうだった？」

入学以来、パーティーの予定や同伴の有無などを尋ねてくれるようになったのは、気にかけてくれているようで嬉しかった。

「最悪でした」

「え？」

あ、ジオ公子の不快な言動を思い出してしまい、素になってしまったわ。笑顔笑顔！

「素敵なパーティーでしたわ」

「何か会いたいとはなかったかい？」

「消したい貴公子が一人」

「え？」

あ、また素になってしまったわ。笑顔笑顔！

「ごさいせんわ」

「そうか、次に——」

「シャルル様あー！」

「あ、オヴェル様がお呼びですわ。私は失礼いたします」

シャルル様を呼ぶ令嬢の声が聞こえ、私は邪魔などしない物分かりのいい婚約者を演じて、エルザたちと教室へ向かった。

「いいの？」

「そういう約束だから大丈夫よ、エルザ。邪魔して気分を害してしまわないよう気をつけないと。朝から声をかけていただけたのよ、感謝しなきゃ」

「ティナ……」

「泣けてくる」

「どうしてよ」

授業が終わり、屋敷に戻ると、執事が言いづらそうにモジモジしていた。何かあったのかと尋ねると、ジオ公子からまた贈り物と面会願いが届いたらしい。

しつこいわね。そんなに文句を言わないと気が済まないのかしら。

「何度来てもお断りをして、贈り物は送り返してちょうだい」

「かしこまりました。念のために旦那様にご報告申し上げてもよろしいでしょうか」

「なんてお伝えするの？ ジオ公子が言いがかりをつけた挙句、しつこく文句を言うきつかけを作ろうとしてくるって？」

「な、なんと！」

「心配かけると思ってたんだけど、しつこい相手の対応をお願いするのなら話すべきだったわ」

「以後、私が責任を持って即座に送り返します」

「ありがとう」

事情を知った執事は、すぐさま退室した。

それでも公子の贈り物と面会願い攻撃は毎日続いた。翌週も。そしてついに……

第二章 揺さぶられる希望

授業を終えてロタリーに行くと、騒ぎになっていた。

「クリスティーナ！」

は!? なんでジオ公子が!? ストーカーじゃない!! しかも、なんでクリスティーナ呼び!? 無視よ、無視。クリスティーナという名は他にもいるわ。

何も見ていないことにして、急いで帰ろうとセルヴィー家の馬車を探す。

「ひゃあっ」

突然、腰を掴まれ体が浮く。ジオ公子に子供を抱っこするように抱えられたのだ。

「俺を無視するのはおまえくらいだぞ」

「ちよつと！ 触らないで！ 持ち上げないで！ 近寄らないで！ 姿を見せないで！ 関わらないで！ 記憶から消して!!」

「……随分と出てきたな。さすがに傷つくぞ？」

「本望です」

「……じゃあ、行こうか。ジオ公爵邸へ」

「助けて〜！ 警備兵さん!!! モゴッ」

大きな手で口を塞がれた。

「見かけによらずジャジャ馬だな」



「ん〜!!」

「セルヴィー家の馬車は帰したから安心しろ」

何を安心しろと!?

抱きかかえられたまま馬車に乗せられ、動き出してしまふ。

「ちよつと！ 放して！」

彼の膝の上に乗せられ、腰に腕を回されて逃げられない。

「放したら逃げようとするだろう？ 走る馬車から飛び降りたら、最悪死ぬぞ」

いくらなんでもそんなことはしない。「止めて」と騒ぐと馬車が止まった。だけど降りたくても

彼の腕は解放してくれない。

「気にするな。早く屋敷に戻れ」

ジオ公子が指示を出すと、御者は短く返事をして、ゴトゴトゴトと馬車は再び走り出す。

「やっと大人しくなったか。股間の上で暴れるから気まずい思いをすところだったぞ」

「変態っ!!」

「だから動くな、わざとか？」

ピタッと暴れるのを止めた。

「よしよし、いい子だ」

「こんなことをしてまで私に文句を言いたいのか？ ジオ公子は暇なのね」

「敬語はどうした、俺、五つ歳上だからな」

「ストーカーの人攫いに敬語を使わなくてはダメなんて法律はないから。しかも変態暇公子だし」
「暇でも変態でもない」

「ストーカーと人攫いは認めたわね」

「……パーティーのときと全然違うじゃないか」

「当たり前よ。ジネットとモルゾン家の顔を立てていたのだから」

「……悪かったな」

ジオ公子は私を座面に降ろし、姿勢を正すと、謝罪の言葉を口にした。

「はい？」

「悪かった！」

「え？ 急に何？ 怖いんだけど」

「おまえなあ」

「拉致されているのよ？ 謝ってもらっても効果ないから」

「……誤解してた。エステルにこっぴどく叱られたよ。おまえから許しを得るまで、モルゾン家へは出禁だって言われたよ」

「ぷっ」

十三歳の女の子に叱られたの？

「公爵も夫人もおまえの味方だし、ゼインには呆れられるし」

「初対面であの態度は、招待したモルゾン家の立場はなくなるわ。叱られる程度で済んでラッキー」

よ。ジオ公爵家に生まれた幸運に感謝するのね」

「辛辣だな」

「お陰様で。あなたのファンからワインをかけられたしね」

「それも聞いた。悪かったな」

「夫人がお相手の令嬢にドレス代を請求してくださいさるの。楽しみだわ」

「一着のドレス代が楽しみ？」

「セルヴィー産の最高グレードのシルクをふんだんに使ったドレスなのよ？ レースも刺繍も同じ

絹糸を使っているの。気を失うかもね」

「いくらなんだ？」

「ごちんまりとした貴族のタウンハウス一棟が建つ費用の二〜三割かしら」

「はあ!？」

高貴な方だけど、彼は豊かな表情を隠さない。

「大陸一の高級品なのよ？ 生産量は少ないし」

「なんでそんなものを着てきたんだ」

「宣伝に決まっているじゃない」

「……」

なんでずっと見つめてくるの？

「まだ着かないの？ ジオ公爵邸は一体どこにあるのよ」

「本当に俺に興味がないんだな」

「なんであると思うのよ」

「まあ、いいや」

「呆れているのは私のほうなの！」

「はいはい」

開けるのが大変そう大きな門をくぐり、ジオ公爵邸に到着した。さすがに大きなお屋敷ね。モルゾン公爵家とはまた違う雰囲気の高邸にちよつと気後れする。

「ほら、降りろ」

先に降りたジオ公子が手を差し伸べてくる。

「御者さん、このままセルヴィー伯爵邸に送ってください」

その手を無視して御者に告げる。

「まったく」

「やつ、ちよつと！」

だが、ジオ公子に抱き上げられて屋敷の中に運ばれてしまう。客間らしき場所に入ると、ソファに降ろされた。そして彼は神妙な面持ちで頭を下げてくる。

「クリスティーナ、先日のパーティーでは大変失礼な態度を取った。申し訳なかった。心から謝罪する」

「もういいです。許します」

「本当か？」

「本当です。ではごきげんよう」

「待て！」

「謝罪は受け取りましたわ？」

用は済んだのだからと、私はすぐに立ち上がった。

「そんなに俺が嫌いか？」

「正直に申し上げても？」

「言ってくれ」

「初対面がアレで好きになるバカを見てみたいです。贈り物攻めが通じないとわかると、押しかけて拉致したり」

「うっ」

「謝ってくださったから問題にしないというだけで、ジオ公子の言動が消えるわけではありません。自分の意思だけ押しつけるのは我儘と云うのです。私が公爵邸へ来たのも、謝罪を受け入れたのも、ジオ公子が公爵家の力を使っているからですよ」

「使っていない」

「では、家紋なしの素朴な馬車に質素な服で身分を告げずに学園の門を通過できますか？」

「……できない」

「私が仕方なく対応しているのも身分差からです」

「挽回するには？」

「しなくていいではありませんか。公子はいつも通り楽しく過ごせますし、私は嫌がらせを受けずに済みます」

そう告げると、ジオ公子は何かを決意したかのように真剣な顔に変わる。

「ゼインとエステルから聞いた。クリスティーナのおかげでエステルの肌が治ったんだろう？ 俺も治してくれ」

突然、話題が変わり驚くが、私は淡々と答える。

「主治医にどうぞ」

「治らないから頼んでいるんだ、頼む！」

彼の肌は確かに荒れていた。クリスティーナは葛藤の末、受け入れる。

「……肌が治り始めたならそこで終わりです、よろしいですね？」

セルヴィーが肌に優しい基礎化粧品などを開発するに至った理由は、クリスティーナが肌荒れに悩む使用人たちの憂いを取り除きたいと思ったから。

真剣に頼み込むジオ公子を突き放すのは心苦しく感じた。

「よろしくない」

彼はそう言って立ち上がり、そばまで来て跪き私の手を取った。

「ちよつと、なんですか」

「クリスティーナ、俺は決めた。終わりになんてしない。ジオ公爵家の力でクリスティーナに関わ

ろう。それなら会えるのだろう？」

「はい!？」

違う方向に振り切れたわね。

「モルゾン公爵家に相談してきます」

「しても後で叱られるだけで、俺の行動は止められないぞ？」

「では、ジオ公爵に苦情を——」

「それはどうなるのかわからないな。女から苦情が届いた経験はないからな」

「うわっ」

手をサツと引き、適当に言いくるめてジオ邸を後にした。

後日、しぶしぶカウンセリングの予約を代わりにとって、ジオ公子に連絡した。しかし、それ以降もなぜか私宛に面会願いが届く。

全て断ったが、また下校時にジオ公子が現れた。セルヴィー家の馬車を帰しているらしく、私をジオ家の馬車に乗せ、再びジオ邸の客間に運ばれた。

なんで学習しないのよ！

「今日はお店でカウンセリングの日では？」

「クリスティーナが直々にカウンセリングするからとキャンセルしておいた」

「はあ!？」

もう面倒なのでさっさと終わらせよう。そう思って、早速、彼の日常生活を聞くと、むしろその生活で肌が荒れない理由がないだろうという回答が返ってきた。

「葉巻なんて生意気です。野菜をたくさん食べてください。このお屋敷では、特に綺麗な井戸水が飲めますので、お酒は数日に一回にして水を飲んでください。規則正しく起きて、夜は早く寝ましょう」

「生意気って……俺、子供じゃないぞ？」

「だからなんです？ 肌荒れを治したいのでは？ 明日、化粧水を届けさせます。では」

ジオ公子が納得したようなので、帰ろうと立ち上がる。

「待て、屋敷の中を案内しよう」

「結構です」

断ったのに、いいからと無理矢理案内された。心を無にして解放を待った。

翌週の登校日。なんだかチラチラ見られている気がする。馬車から降りると、シャルル様に声をかけられる。

だが、続いてすぐに到着した馬車から、一つ上の学年のアレクシア・サリモア公女が現れた。

「あなたって節操ないのね。シャルル様と無理矢理婚約したくせに」

「はい？」

またソレかと溜息が出る。

公女は私を睨むのをやめて、シャルル様の腕に絡みついて笑みを浮かべた。

「シャルル様、今度のパーティーもエスコートしてくださいさるでしょう？」

「え、ええ」

「お揃いの衣装が出来上がったの。授業が終わったら試着しにいらして」

サリモア公女は優越感に浸った顔を私に向けて、そのまま二人で教室へ歩いていった。

いい加減慣れてもいいはずなのに虚しい。

女性関係は一生続けると宣言されたけれど、結婚して初夜を迎えたら、子供が産まれたら……？ 何かがきっかけで、唯一無二の愛をもらえるのでは、と希望を捨てられない。

あの美しい青い瞳にいつか熱が籠る目を夢見て、今は聞き分けのいい婚約者の役を徹底するしかない。そう自分に言い聞かせた。

翌日、午前の授業が終わり、学園の食堂でいつも通りジネットとエルザと食事をしながら話をしていた。

「本当、ごめんね。とんでもない曲者くせものを紹介しちゃって」

ジオ公子の二度目の拉致を耳にしたらしく、ジネットが紹介したことを謝ってくる。

「時を巻き戻せないかしら」

「でも、あのジオ公子でしょう？ まったく想像つかないわ。お姉様たちに聞いたたら、とにかく令嬢は無視されるらしいの。親絡みで紹介されても挨拶と生返事だけらしいわ。友人の家族とか婚約

者で、言い寄ってこない令嬢にだけ普通に話すらしいと言っていたわ」

口を尖らせる私に、エルザは優しく言葉をかけてくれるが、心労はたまっていくばかり。

「まさかティナが懐かれるとはね」

ジネットがしみじみと言う。

「なんであんなに強引なの？ それに、なんで私の下校時間を知っているのかしら」

「一人っ子だから？ あと、多分、ゼイン様の持っている私の時間割を見たと思うの」

「仲良しねえ」

ゼインとジネットの仲睦まじい様子が垣間見えて、エルザがからかう。

「エルザだって仲良しじゃない」

そんな会話をしていると、私の隣に誰かがトレイを置いた。エルザとジネットはポカンと口を開けている。

「ここ、いいかな」

トレイを置いたのはシャルル様だった。

彼はいつも仲の良い令息二人と、その時々で色々な令嬢たちと一緒に食事をする。令嬢たちの中で特に彼のそばにいる頻度が多いのは、サリモア公女、オヴェル子爵家のマリエッタ様。他はその日の運。私は彼を遠くから見つめるだけ。

「どうぞ」

喜びを隠して緊張しながら答えると、シャルル様が隣の席に腰をかけた。

これまで近くに座ることさえできず、まるで赤の他人のようで悲しかった。それでも、婚約者でいられるのだから、少しくらい我慢しなければと自分に言い聞かせていたのに。

「クリスティーナ、今週の土曜日は空いてる？」

「……」

「クリスティーナ？」

「あの、日中は予定が……」

「夕方からならかまわない？ パーティーに同伴してもらおうと思つて。サリモア公爵家のパーティーがあるんだ。アレクシア様の兄君の誕生日の祝いなんだよ」

「私ですか？ ……確か、シャルル様はサリモア公女をパートナーにされるとお聞きしましたが」

「聞こえていたのか。実は用事で欠席するはずだったアレクシア様の婚約者が都合をつけたので、僕との約束はなくなった。だからクリスティーナに同伴してほしいんだ」

サリモア公女には婚約者がいるものね。私を誘うのは仕方なくだとしても、声をかけてもらえて嬉しくて、すぐさま承諾する。

「良かった。贈り物は連名にするから気にしないでくれ。着ていくドレスはあるよね？」

「大丈夫です」

「じゃあ、夕刻に迎えにいくよ」

「お願いします」

「そういえば、最近ジオ公爵家の令息と友人になったのかい？ 学園まで迎えに来るのが見え

て……随分と親しそうだったから」

「親しいわけではありません。身分の高い方に少し振り回されているだけです」

「そう？」

彼はいつもの微笑みを浮かべているけど、私の返事に納得していないように感じる。

シャルル様はジネットに出席の有無を尋ねた後、サツと食事を済ませて先に席を立った。

「相変わらずいつも同じ笑顔ね。でもやっぱり目の奥が笑っていないわ。当日、ヘインズ様から離れるならジネットの近くにいろのよ」

エルザはパーティー当日は王妃殿下と約束があるらしく出席できないため、どうも心配らしく、私にそう忠告してくれた。

午後の授業を終え、屋敷に帰った私は、衣装部屋に直行した。

何を着て行こうかと悩みながら、まだ着ていないドレスに触れる。新品のドレスは十着以上ある。その中でもシャルル様の瞳の色に少し近い青い布で作ったドレスを手にとった。

これに着たい。だけどサリモア公女の前では着ないほうがいい気がする。それに彼が嫌がるし。

仕方がない。淡いグリーンに銀色の刺繍のドレスにしよう。銀色はシャルル様の髪の色だけど、刺繍くらいなら許されるはず。

少しでもシャルル様の瞳に良く映りたくて、当日までに肌を更に磨き上げた。

当日、ヘインズ家の馬車でシャルル様が迎えに来てくれた。

馬車に二人きりという状況にドキドキする。社交辞令でも綺麗だとか、素敵だドレスだとか似合うとか言ってもらえたらと思うのだけど、シャルル様は目が合っても微笑みだけで、すぐに窓の外へ視線を向けてしまう。

美しい銀髪はサラサラしていて、青い瞳は外からの光が当たってキラキラしている。

素敵ですとか、カッコいいですとか言いたくなるけど、言ってはいけない。婚約したてのときに言ったら、不快そうな顔をされて、しばらく口をきいてもらえなかった。

そう、シャルル様が私の前で初めて笑顔を崩した瞬間だった。いつも多くの令嬢や夫人方に言われて微笑んでいるのに、私だけは言ってはいけないらしい。

また彼を見つめて「不快だ」と言われないよう景色を眺めているうちに、サリモア公爵邸に到着する。

パーティー会場内は、モルゾン公爵家のパーティーとは違う顔ぶれで、挨拶を交わしたことがない方が多く、場違い感に襲われた。

シャルル様と同伴したから公女や取り巻きに絡まれる可能性が高いわね。早々に壁の花になるかテラスへ逃げたほうがよさそうだな。

シャルル様は私にジュースを渡し、自分はシャンパンを手にとった。思えば彼が一度もお酒を勧めないのは、私が酔ってしなだれるかもしれないと懸念しているから？

「ようこそ」

突然の声に振り向くと、今夜の主役サリモア公子が奥様連れ立っていた。シャルル様はグラスを置いて挨拶する。

「ご招待いただきありがとうございます。お誕生日おめでとうございます」

「ありがとう。妹が迷惑をかけているようだね」

「とんでもないことでございます、友人としてお付き合いをさせていただいております。サリモア夫人、お久しぶりです」

「お久しぶりですわ。……そちらの方は？」

「彼女は婚約者です」

「クリスティーナ・セルヴィーと申します。お誕生日おめでとうございます」

「婚約者!? そ、そう……アメリカ・サリモアと申します」

夫人は驚いているようだった。私を伴って出席したから驚いたのか、シャルル様に婚約者がいることを失念していたのかはわからないけど、私は微笑むしかない。

そのとき、見慣れた二人が現れ、内心ほっとする。モルゾン公子とジネットだ。

「おっ、クリスティーナ嬢」

「モルゾン公子、ごきげんよう。ジネット、今夜も素敵よ」

「ティナこそ」

親しげに私に挨拶してくれたモルゾン公子に、サリモア公子が尋ねた。

「ゼインはセルヴィー嬢と親しいのか？」

「^{ジネット}婚約者の友人で、去年からモルゾン家でも仲良くしてもらっているよ。両親はクリスティーナ嬢を気に入っているし、妹のエステルなんか彼女にべったりだよ」

「それは知らなかった」

モルゾン公子の説明を受けて、サリモア公子が私をじっと見てくる。

……品定めかしら。早く壁の花になりたい。

「シャルル様あゝ」

そんなことを考えていると、シャルル様の背後から声が聞こえたと同時に、彼の腕に美人が絡みついた。そして、猫なで声で彼におねだりする。

「シャルル様、今夜は私の隣にいてくださる？」

「アレクシア様、婚約者はどうなさったのですか」

「緊急の用事ができたから来ていないの。ね、いいでしょう？」

「アレクシア様、ヘインズ様は婚約者を同伴なさっていますわ」

困惑するシャルル様を見かねてか、サリモア夫人が間に入った。

「お義姉様、婚約者といってもお飾りの婚約者ですわ。いつもシャルル様は私たちと一緒に過ごしておりますもの」

「今夜は駄目だ」

「お兄様が決めることはありませんわ。ね、シャルル様」

サリモア公子の言葉をサリモア公女は一蹴し、シャルル様を見つめる。

シャルル様は答えない。私に言わせたいのね。

「シャルル様、私より公女を優先なさってください」

「ほら、言った通りでしょう」

サリモア公女が得意げな表情を見せる。直後、最近よく聞く声が私の背後から聞こえた。

「決まりか？」

「ヒューゴ様！」

サリモア公女は頬を染め、彼の名を口にした。

「公女、俺の名を勝手に呼ばないでくれ。ヒューゴと呼ばせたい女はクリスティーナだけだ」

「」「」「」「」

私以外の六人は声を揃えた。

「で、決まったのか？」

「何がですか？」

いきなり尋ねられ、私は思わず首をかしげてしまう。

「おまえの隣が空いたかどうかだ」

なんて言おうか戸惑っていると、ジネットが答えた。

「ジオ公子、ティナをよろしくお願いします」

「よし、決まりだ。クリスティーナ、行くぞ」

「ちょっと！」

ジオ公子は私の腰に手を回すと、人の輪から抜ける。そのままテラスに連れ出して、真剣な表情で問う。

「あんな侮辱をいつも許しているのか」

「……。ジオ公子、私は一人で大丈夫です。シャルル様とは、そういう約束なので」

「約束？」

釈然としない様子のジオ公子に、私は婚約時にシャルル様と取り決めた約束について話す。

「はあ!? なんなんだよ、それ」

「貴族の政略結婚では珍しくはありません。私は好きな人の正妻になれる幸運に感謝をしなくてはなりませんので」

「好きな人って言っているけど、どうせ顔だけで選んだんだろう？」

そう言われると……一目惚れと言っても過言ではないから、全否定はできないけど。

「あいつとはタイプが違うだけで俺の顔も良いぞ」

「ふっ」

ジオ公子はにやりと色っぽい笑みを浮かべるが、私は思わず笑ってしまう。

「なんで笑うんだよ、事実だろう」

「そうですね、事実ですね」

この変態ストーカーの存在に元気づけられるなんて。

ジオ公子のワインレッド色の髪は、公爵と同じ色。黄色に近いオレンジ色の瞳は、公爵夫人の色

で、さらに王妃殿下、王太子殿下とも同じ。本来なら私が関わるはずのない高貴な令息なのだなと思いつながら、うっかり見つめてしまっていた。

「なんだ？ 俺の顔が美しいと認めるか？」

「否定したことはありませんよ、ジオ公子は男らしい美男子で、髪も瞳の色も美しいです」
「っ！」

ジオ公子は一瞬で顔も耳も赤くなった。

「あははっ！ 俺は美しいって言うておいて、私が同意すると照れるなんて面倒臭いですけど、可愛いですね」

「かつ、かわい！」

「よしよし。何か飲み物を取ってきてあげますね」

「駄目だ。俺から離れるな」

「ジオ公子？」

「俺の名はヒューゴだ。ヒューと呼べ」

愛称になっちゃったじゃない。

「ジオ公子を愛称なんかで呼べません。私は友人でもなく単なる知人で、伯爵令嬢ですから」

「ふん！ なら命令だ！」

「こんなところで俺様を発揮しないでください」

「会場に戻るぞ。俺を名前で呼ばないと、とんでもない噂を流すからな」

「はい!？」

手を繋がれ引つ張られ、会場に戻った。

「おっ？ ヒューゴが女……令嬢連れてるなんて」

ジオ公子は友人の令息たちに私を紹介した。

「ローランドと申します。ヒューゴの彼女？ 女慣れしてないから粗相があるかもしれないけど大目に見てやってね」

三人目の令息の発言をきっかけに他の令息たちもからかいたした。

「よろしく。そうかそうか、ヒューゴにも遅い春が来たんだな。婚約発表はいつだ？」

勘違いされてるじゃない！ 私は慌てて自己紹介する。

「ジ……ヒューゴ様とは友人でもなんでもない、赤の他人のクリスティーナ・セルヴィーと申します。お会いできて光栄です。僭越ながら申し上げますが、私には婚約者がおります」

「うんうん……ん？ ってことは、ヒューゴの片想い？」

「初恋で略奪!? えっと……クリスティーナ嬢の婚約者は誰？」

令息たちは驚いた表情を浮かべ、矢継ぎ早に質問してくる。

「ヘインズ伯爵家のご令息のシャルル様です」

友人の一人に尋ねられて、私は答える。

「君があ的美男子の婚約者!？」

私の返答に令息たちは目を見開く。不釣り合いと言いたいんですね。

「不相応ながら、その通りです」

「ごめん、そういう意味じゃなくて。……ヒューゴ、諦めろ。勝ち目はない」

令息がヒューゴ様に同情したような目を向ける。だが、シャルル様が別の令嬢と一緒にいる姿を視界に入れ、不思議に思ったらしく、首をかしげた。

「だけど、アレクシア嬢が彼を……」

「ああ、クリステイーナとヘインズは婚約はしてるが、恋愛は自由なんだよ。結婚後も愛人を作ってもいいらしい。お互いに、な」

ヒューゴ様！ 余計な説明をしないでください！

「なるほど。でもアレクシア嬢の婚約者は？」

「サリモア家のほうが立場が強いから文句を言えないのか、興味がないのか黙認しているようだな。今日のパーティーも領地から戻れないってあらかじめ欠席の返事が届いたらしい」

ヒューゴ様の言葉を聞いて、反射的に私は反応してしまう。

「急遽欠席になったではありませんか？」

「来る予定は最初からなかったはずだ。到着時の挨拶でそう聞いたからな」

つまり、最初からサリモア公女は、シャルル様を会場で奪って、同伴している私に恥をかかせたかったってこと？

「わざわざそんな意地悪しなくたって、いつだってシャルル様は私を後回しにするのに……」

さっきのシャルル様と公女を思い出す。くすぶっていた胸の中のモヤモヤに燃料が投下された。

思わず俯く。すると、ヒューゴ様が肩を引き寄せて、頭に唇を当てたが、私の心の中はそれどころではない。

「クリステイーナはサリモア公女に騙されて出席して、さっきパートナーを横取りされたんだ」

「どういうことだ？」

令息たちは怪訝な表情を浮かべる。

私は面倒だから誤魔化そうとしたけど、無駄だった。仕方なく経緯と顛末を話す。

「うわっ、性悪だな」

「クリステイーナちゃんもかわいそうだけど、あんな女と結婚しなきゃいけないアレクシア嬢の婚約者も悲惨だな」

ヒューゴ様の友人たちはいい人みたい。

「俺の目に狂いはなかった」

ヒューゴ様がぶつきらぼうに言う。私には意味がわからない。

令息が私の疑問に気づいたのか、教えてくれる。

「昔、ヒューゴはアレクシア嬢からしつこくアプローチされていたんだよ。サリモア公爵家から正式な求婚もあったけど、ずっと断り続けた。それで、彼女は入学したらヒューゴへのアタックはピタッと止めて、矛先をヘインズ伯爵令息に移したってわけだ」

「そうでしたか」

ヒューゴ様の過去の苦勞を知り、つい遠い目をしてしまう。

「クリステイーナ」

カチッ。

ヒューゴ様に名を呼ばれたと同時に、手を掴まれると、一瞬で手首に何かをつけられた。手首を見ると、繊細な彫金に宝石がちりばめられた腕輪がはめられている。

「これは？」

「汚したドレス代の足しにもならないが、お詫びの贈り物だ」

「ワインをかけた令嬢には、すでにモルゾン公爵夫人から請求していますので、こちらをいただく理由はございません。……あれ？ 留め具がない。だってさっきは……」

ヒューゴ様はニヤニヤして、恐ろしいほどに小さな鍵をチラつかせた。

「この鍵がないと駄目なんだ。引っ張っても抜けないぞ。下手にいじると鍵穴が壊れるからな。あと、それは世界に一つしかないから壊して外そうとするな。ジオ公爵家の家宝だからな」

なんでそんな貴重な物を!!

「外してください」

「嫌だ」

「外してください」

ヒューゴ様はツカツカと窓へ向かい、開ける。そして。

「ふん！」

親指の爪より少しだけ長いサイズの鍵を思いっきり投げた。

「ちよつと!!」

覗き込むも、簡単に探せそうもない。誰かが踏んで土に食い込んで見えなくなったり、木に引っかかっていたりするかもしれない。使用人総出で探しても見つからなさそう。

「いい加減にして! こういうのは詫びとは言わないのよ! 傲慢で無礼でストーカーで変態で拉致犯の上に拘束道具なんて何を考えてるのよ!」

重要な価値ある代物への恐怖と、あまりにも自分本位なヒューゴ様の行動に、本音が口をついて出る。

ヒューゴ様の友人たちは驚き、ポカンとしていた。……まずい。皆様の前だった。

「嫌ですわ、ヒューゴ様ったらお戯れをつ」

何もなかったかのように、淑やかな微笑みを作る。

「アハハハッ」

一瞬の静寂の後、友人たちが声を上げて笑い出した。

「もう遅いよ、クリステイーナ嬢。まあ、ヒューゴが喜んでいるからタメ口で罵ってやってよ。

ヒューゴ、本当に春が来たんだな」

「クリステイーナ、良かったな。公認だぞ」

ヒューゴ様は友人の言葉にうなずくと、嬉しそうな顔を私に向けた。

「良くありませんっ! なんの公認ですか!」

「もう敬語に戻ったぞ? 焦らすタイプなんだな?」

「クリスティーナ嬢、遠慮はやめてあげて。強硬手段をとられると嫌でしょ？」
「なんですか強硬手段って。これ以上!」

そのとき、ダンスが始まる合図が奏でられた。友人たちにダンスに誘えと促されたヒューゴ様は、正面を向く。その様子を見て、私はあるアイデアをひらめく。

……サリモア公女みたいなタイプが嫌なら真似すればいいのかしら。

「ヒュー。跪いてダンスを踊ってほしいと懇願して」

さあ、誰がおまえにとか言いながら怒って! 興味を失って!

そう期待したのに、ヒューゴ様は片膝を床についた。

「クリスティーナ、このヒューゴ・ジオに愛しい貴女と踊る機会をいただけませんか」

馬鹿なの? みんな見ているのよ? 誤解されるじゃない!

「この膝が割れようとも、貴女が受け入れてくださるまで——」

「わかりましたからっ」

ヒューゴ様は嬉しそうに微笑み、私の手を取って立ち上がった。

ダンスホールへ行くとすでにシャルル様がいて、その胸にはサリモア公女が頬を付けていた。彼女は視界に入った私を睨む。シャルル様は私に気づくと、いつもの微笑みが消えた。

すると、ヒューゴ様は私の腰に腕を回して、グッと引き寄せる。ち、近い!

「余所見をするな。今は俺だけのクリスティーナだ」

「違いますけど」

「違わない。……公女のせいで不快になった気分がこの腕輪で紛れただろう?」

彼の意外な言葉に少し驚き、じっと見つめた。

曲が流れると、彼は力強くリードする。引つ張り回されている気がするのに、なぜか苦ではない。むしろ楽しいかもしれない。やはりこんなでも、ジオ公爵家のご令息なのだよ。

「ヘインズと極力二人きりになるなよ」

ステップを踏みながら突然変なことを言い出した。

「はい? シャルル様は婚約者です」

「気を許すな。婚約者だろうが、他人で男だろう」

あなたのほうが気を許してはいけない危険な人物なのに?

「私は彼を愛しているのです」

「顔をだろう? 考えてみる。あの顔に飽きたらどうするつもりだ? 良いところがない浮気者だぞ?」

「そんなことは……」

「じゃあ、あいつの良いところを言ってみろ」

「優雅」

「優雅とは言えないな。顔と髪でそう見せているだけだ。俺のほうがよっぽど優雅だ」

「異議あり」

「はあ、他は?」

「伯爵家の嫡男」

「どんな伯爵家なのかが大事だろう。セルヴィー家が相手にする価値はない。良く言えば、質素な伯爵家、それだけだ。うちは公爵家だし金も権力もコネもある。それに一人息子だ」

「兄弟がいたら危なかったですね」

「どういう意味だ？」

跡継ぎ争いで負けそうだと言いたいけどやめておいた。

「黙秘です。シャルル様は優しいんです」

「どんな女にでもな。だが、おまえには微笑みながら冷遇しているじゃないか」

「私は結婚したら正妻として敬ってもらえます。権利も守ってもらえます」

「将来、愛人と婚外子を屋敷に住まわせるかもと宣言しているのに？ それはお飾りの妻でいるという意味だ。もし夫婦の結婚記念日に愛人が仮病を使って邪魔をしたら、あいつはどっちを優先すると思う？ 愛人側だ。執事に命じて、花でもおまえに贈っておけば祝ったと言えるしな」

「まさか。そんな——」

「祝いのディナーに愛人と子を同席させる可能性もある。……おまえはわかっていない。一時の愛人として割り切れるなら同居はしないし、責任感があれば婚外子など作らない。正妻が不妊か女児しか産めなかったら別だが、あいつは最初からそのつもりだ」

ヒューゴ様の眼差しは真剣そのものだ。

「でも、正妻として扱ってくださいさるはずですよ」

「外部の目があるときは妻を優先するだろうが、それ以外は愛人を優遇するはずだ。庭園や食堂や居間から、あいつと愛人と婚外子の笑い声が聞こえる日々を過ごす羽目になる」

「やめてください！」

「ほぼ毎晩あいつは愛人の寝室で眠るのだぞ？ おまえとの子作りの夜も、義務を終えたらすぐに寝室から立ち去り愛人のもとへ向かうはずだ。考えが甘いんだよ。キスどころかそれ以上のところもその目で——」

「なんでそんな意地悪を言うの!! ううっ……」

もうやめて! 聞きたくない!

彼はダンスをやめて私をテラスへ連れ出し、指で私の涙を優しく拭いた。

「意地悪で言ったんじゃない。選択肢のある今だから忠告したんだ。式を挙げたら間に合わない。

クリステイーナが傷つくとわかっていて教えないなんてできない。俺たちは友達以上だろう」

「友達？」

「友達以上だ」

「……この婚約は私の気持ちを察した父が交渉して決まったもののなのです。本当に愛人と同じ屋敷に住むことになっても私のせいです。覚悟が足りなかったのは私なのです」

「絶対にうまくいかない。辛い結婚生活を死ぬまで、もしくは離縁するまで続けるつもりなのか？」

「子供が生まれたら変わるかもしれません」

「おまえが男児を産めば義務を終えたと言って、寝室には現れず愛人だけを抱くようになる。いつ

か報われると思っているようだ」

「報われない？　だって正妻として扱うって……」

「愛人がメイドの誰かを味方に付けて毒を飲ませる可能性もあるし、邪魔だと思えばヘインズがやる可能性もある。そこまでいなくても母子で冷遇される可能性もある」

「考えすぎです」

「愛人の子の誕生日は外出をしたり贈り物に馬を買ってやつたりしても、おまえとの子には歴史書を買わせて机の上に置いておくだけかもしれないぞ。『お父様はなぜ、僕たちを愛してくださらないのですか』そう質問される日が必ずやってくると思ったほうがいい」

私にどうしろと？　そう言いたかったけど、私が選択した婚約だから。

「ご忠告、ありがとうございます」

頭を下げて、彼を置いて会場に戻ると、ジネットとモルゾン公子が駆け寄ってきた。

「大丈夫!?　すぐ揉めていたようにけど」

「大丈夫です。……って、モルゾン公子!?」

モルゾン公子が突然私の腕を掴んだ。

「これ、どうしたの？」

「ゼイン様、ティナが驚いていますわ」

「あ、ごめん。それは」

ジネットに注意されて、腕を離れたモルゾン公子は腕輪を指差した。

「ヒューゴ様に勝手に付けられたのです。鍵は彼が庭に投げたので、このままに……。ゼイン様、この腕輪に覚えがあるのですか？」

「昔、ジオ邸の宝物庫を見せてもらったときに教えてもらったんだけど、これは今は亡き鍵の魔術師と呼ばれた鍵職人が手がけたものなんだ。ほら、ここ。ジオ公爵家の家紋と、公爵夫人の実家の家紋が彫られているだろう？　結婚祝いに当時の王太子夫妻が贈った品だよ」

「すごいわ！　素敵！　でも、そんなに貴重な品をティナに？」

「それだけヒューゴがクリスティーナ嬢を気に入ったという証拠だ」

「誤解ですわ。以前のパーティーでヒューゴ様のファンが私のドレスを駄目にしてしまった償いかと。それほど貴重なお品でしたらいただけません。解錠できましたら返却しますわ」

「そうよね。ティナには婚約者がいるものね」

パーティーが終わり、ヒューゴ様から送ると言われたけど断った。そのときタイミングよくシャルル様が来てくれたので彼と一緒に馬車に乗った。

馬車の中で彼はいつもの微笑を浮かべていたけれど、私の手元を見ると不機嫌そうに足を組んで車窓の外に顔を向けてしまった。

◆ ◆ ヒューゴの視点 ◆ ◆

歳を重ねるごとに避けられないと感じていた。俺はジオ公爵家の嫡男として、いつかは妻を娶り

後継ぎを儲けなくてはならない。だが、どの令嬢にも魅力を感じなかった。

子供の頃、ジオ家と深い繋がりを持ちたい親たちが娘の背中を押していた。だが、そのときの俺は剣を握り、弓を引き、領地で獣を狩ることに没頭し、次のステップに向かっていった。体が大人として機能し始めた頃には、賊を狩っていた。

一方、それくらいの年齢になると、茶会という見合いの席に現れる令嬢たちの魅力のなさにますます落胆していた。話題はクソつまらないし、令嬢たちの目からは未来の公爵夫人になりたいという欲望を感じ取れた。そんな女を妻になどしたくないと全て断った。

学園を卒業する頃は、既成事実を作ろうとする女たちに気をつけなければならなかった。

結局、友人たちが結婚していく中で俺は婚約者を選ばずにいたのだ。国外を視野に入れようとしていた最中、モルゾン家のパーティーでついに見つけた。

また言い寄られるのかと思って、失礼な言葉を口にしたら、彼女は俺に怒りを滲ませた眼差しをぶつけた。

その瞬間から動き始めた俺の心が錯覚ではないかと確かめるため、早く会いたかったが、詫びの贈り物もメッセージカードもそのまま返されてしまうし、面会の申し込みも断られた。

強引に会って心から謝罪をした。彼女の表情や言葉全てに集中した。魂の強さを感じ取れたし、彼女自身が光り輝いて見えた。

俺の伴侶はクリスティーナ・セルヴィーしかいないと確信した。

だが、彼女には慕う婚約者がいた。彼女からも聞いたが、調べさせるとんでもない男だった。

単なる政略結婚なら割り切って妻となるだろうが、彼女のほうに彼への愛があるのなら傷つく未来は容易に想定できた。

モルゾン公爵家の嫡男ゼインが俺に囁く。

『クズだからこそ隙が生まれるんじゃないか。ヒューゴが彼女の心に入り込めば、ヘインズと破局しても彼女はすぐに立ち直れる。彼女のほうが気持ちが冷めて、ヘインズを捨てるかもしれないだろう？』

『あの美貌と争うのか』

『らしくないぞ。ヒューゴ・ジオは顔だけで勝負するつもりか。あの子は良い子だしセルヴィー家も素晴らしい。気難しいエステルは彼女が大好きだし、ジネットも彼女にご執心だ』

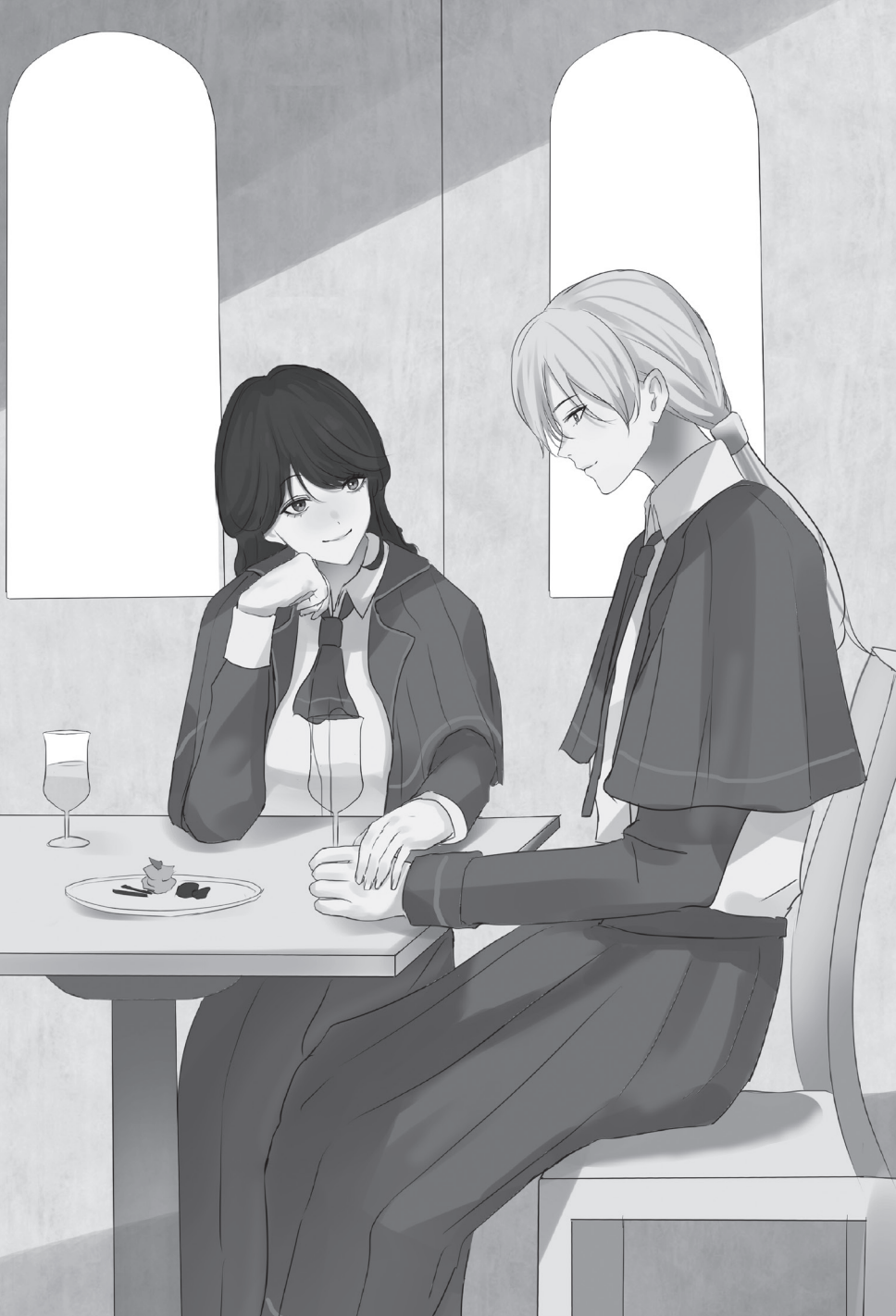
『確かに今までにない女だった』

『ここまで待ったんだ。やっと出会った運命の女を手に入れろ』

だから強引に彼女と関わってきた。口説くのが下手だと笑われるだろうか。知れば知るほど魅了されて余裕がなくなるのだから仕方ないだろう。

第三章 婚約者の一面

登校日、昼食の時間になり学園の食堂に移動した。



立ち読みサンプル
はここまで

違和感がすごい。食堂に入った瞬間から視線が集まり、三人の令嬢が私にわざと聞かせるように話し始める。

「シャルル様と無理矢理婚約したくせに、高位貴族のご令息方に媚を売って取り入っているなんて」

「あら、花を安売りしていると聞きましたわ」

「まあ、ふしだらですわ」

媚を売る？ 花を売る？ どうしたらそんな噂が立つのよ！

エルザとジネットが令嬢たちのほうを一瞥するとピタッと止み、彼女たちは別の話題を始める。

「今日から留學生が登校してると知っていた？」

「学年の途中で？」

「短期留學ですって。一年生よ。すごく……ある意味魅力的らしいの。あ、ほら、入ってきたわ」
ある意味？ 顔を向けると、シャルル様たちと一緒に初めて見る令嬢が入ってきた。

顔は美人とは言えないけど、もしかしたら国一番かと思うくらいスタイルが抜群だった。豊かすぎるバストに細いウエスト、ヒップも豊満だけどキュッと上がっているのがスカートの上からでもわかる。男子生徒、男性職員は皆釘付けた。

彼女たちは、嫌でも話が聞こえてくるほどの近い席に座った。

「本当に留學してきて良かったです。シャルル様のような素敵な方に出会えるなんて」

「僕こそエンブレ様と学園で過ごせるなんて幸運です」